

主 題：私たちに与えられた唯一の救い主**聖書箇所：使徒の働き 4章12節**

今日のテキストは使徒の働き4章12節です。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」ペテロはこのようなメッセージを語りました。背景を説明します。ペテロとヨハネがエルサレムの神殿にやって来ます。そして、そこで生まれつき足のなえた人の病を癒すのです。このような奇蹟が起こりました。その出来事を目撃した人たちはペテロのもとに集まって来ます。そして、ペテロは彼らに対してこの奇蹟は自分ではなく主イエスの御力によって為されたことを教えるのです。また同時に、彼らに対してペテロは主イエス・キリストこそが約束のメシア、救世主であることを教えました。そして、この主イエス・キリストを拒み続けて来た彼らに対して「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」(使徒3:19)とそのように命じたのです。この日に「…みことばを聞いた人々がだれい信じ、男の数が五千人ほどになった。」(使徒4:4)と聖書は教えています。

このような出来事がエルサレムで起こったのです。当然多くの人たちがその出来事に気付きます。民の指導者たち、長老や学者たちも同じでした。彼らはペテロとヨハネを捕えて、そして、翌日にサンヘドリンと呼ばれる大祭司を議長とする71名によって構成されたユダヤ議会に彼らを呼び出して尋問するのです。4:7「…「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」と。その時ペテロは、この議会のリーダーたち、彼らは熱心なユダヤ教徒でありユダヤ教のリーダーたちですが、彼らに対して、主イエス・キリストこそが約束の救世主であることを伝えるのです。

その時に語ったメッセージ、それが今読んだ4:12です。これが今日皆さんにお伝えしたいメッセージです。「主イエス・キリストだけが救い主である」ということです。

私たちがこんなことを言うと、ある人たちは「いや、みな言うことは同じですよ。どんな教えを信じていようと言うことは同じだ。自分の教えが正しいとする。」と、そのようなことを聞かれたことはあると思います。そのように言う人はみな何かを信じているのです。人間は何かを信じています。神がいると信じているか、神はいないと信じているか…。すべての人は何かを信じています。そして、信じている人はみなこう言います。「自分が信じているこの教えこそが真実だ」と。

皆さん、人々はいろんなことを信じているのですが、一番大切なことは、その自分の信じている教えが真実であるとする根拠がどこにあるのかということなのです。多くの場合、みなそこまで考えていません。そのように言われたから、何となくそれが自分の心を慰めてくれるからと、いろいろな理由があるでしょう。私たちは自分の信じているものをそこまで調べたことがない、本当に私の信じているものは真実なのか？と。ここでペテロは「イエス・キリスト以外にはだれによっても救いはない。イエス・キリストだけが救い主だ」と言いました。私たちが考えるのは「それは本当なのか？何を根拠にそのように言うのか？」かもしれません。今日はそのことをごいっしょに考えたいと思います。

この後ペテロは私たちに四つのことを教えてくれます。四つの根拠を私たちに示してくれます。それを通してペテロは「確かに、イエス・キリストだけが救い主である」と、そのことを明らかにするのです。みことばを見ていきましょう。

☆主イエスだけが救い主である四つの証拠**A. 罪のないお方**

当時のユダヤ教のリーダーたち、祭司長や民の長老たちはイエスを捕えて大祭司カヤパのところに連れていきます。そして、サンヘドリンに主イエスを立たせるのです。マタイ26:59に「さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めていた。」と書かれています。不思議に思いませんか？なぜ、「うそ」の証言の求めることが必要だったのか？もし、本当にイエス・キリストのうちに私たちと同じような罪があるなら偽証を求める必要などありません。みなに聞いて回ったら「この人はこんなうそを言った。こんな罪を犯した。」とそんなことが明らかになるけれど、イエスに関してはリーダーたちは「イエスを訴える偽証を求めていた。」と言うのです。

その翌日ですが、彼らはイエスを死刑にするために総督ピラトに引き渡します。マタイ27章の初めに書かれています。27:2「それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。」と。なぜ、イエスをピラトに引き渡すのか？イエスを死刑にするためにはローマの許可が必要だったからです。そして、イエスを取り調べたピラトは次のように証言しています。ルカ23:13-16「13 ピラトは祭

司長たちと指導者たちと民衆とを呼び集め、:14 こう言った。「あなたがたは、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて来たけれども、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何も見つかりません。:15 ヘロデとても同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません。:16 だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。」と。このヘロデはヘロデ・アンテパスのことです。裁判官たちはイエスを調べたけれど、あなたがたが訴えている死罪に値するような罪を見いだすことはないと言ったのです。

彼ら以外にもイエスのことを知っていた人はたくさんいました。少なくとも、33年間、イエスはこの地上で過ごされました。その大半はナザレの町で過ごされたのです。その町の中には「イエスはこんなことをした、こんなことを言った」と、イエスをよく知る人たちが居たはずです。また、公の生涯、ご自分がキリストであることを明らかにし、人々に救いのメッセージを伝えた3年間を見ても、イエスは様々なところで出て行かれて多くの人たちに出会いました。不思議なことは、だれ一人として「イエスはこんなことをした、こんなことを言った」とイエスの罪を明らかにする証人はいなかったことです。もし、そういう人がいたなら当然彼らはエルサレムにやって来て、祭司長やユダヤ教のリーダーたちのところに行って「私は知っています。証言します。」と言うでしょう。そして、リーダーたちは喜んで彼に多額の金を与えたことでしょう。ちょうど、ユダに与えたように…。

でも、だれ一人としてそのような人物はいなかったのです。これは何を意味しているのか？イエスを調べても調べても彼のうちに罪を見いだすことはなかったからです。

B. 身代わりに死なれたお方

イエスは私たちの身代わりとして死なれたお方です。皆さんに思い出していただきたいのは、イエス・キリストが十字架に架かる時、ルカ23:46「イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。」と記されている箇所です。この「ゆだねる」ということばは「何かにまかせる」という意味です。同じことが使徒14:23に書かれています。そこにはこうあります。「また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らをその信じていた主にゆだねた。」とこの「ゆだねた」と同じことばです。この箇所でも説明します。これはパウロとバルナバのことです。彼らが教会を訪れてそこで長老たちを任命したのです。そして、選んだ長老たちを主の御手にゆだねました。この行為は当然パウロとバルナバがこのように行おうと決めて行なったことです。この人物を主に「ゆだねた」のです。彼らはそのように決心しそのように決めてそのように行ったのです。当然、そこにこの行動を行った人の意志が反映されています。

もう一度、イエスの最後のことばを見てください。そこで主ご自身は「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」と言われました。不思議な最後、不思議な最後のことばです。この後主は最後の呼吸をし、そして、息を引き取られます。私たちが「死」ということを考えた時、死は私たちの意志によって左右されるものではありません。どんなに生きたいと願っても死の瞬間が訪れるとそれですべては終わってしまいます。死にたいと強く願ったから死ぬるものでもありません。つまり、「死」は私たちの意志によってコントロールできないものです。でも、イエスの死を見ると、今この瞬間にこの地上でのわたしの生活が終わる、その最後の瞬間をイエスは知っておられたこと、だから、「私の霊を父なる神の御手にゆだねます。」と言われ、そして、「息を引き取られた。」のです。パウロとバルナバが選んだ長老たちを主におゆだねしたように、イエスのこのことばを見るときにイエスご自身はご自分の霊を父なる神にゆだねられたのです。ご自分の意志をもってその行為をされたのです。

ということは、イエスは死をもコントロールできるお方だということです。「これが最後だ」と。そして、この地上での人としての生活を終えられたのです。イエスのことばを思い出してください。ヨハネ10:18「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」、人々はイエス・キリストを十字架へと追いやり殺したと思うかもしれない。でも、主が言われることは「わたしは自ら進んで自分のいのちを捨てる」でした。ご自身の意志でした。

***では、どうしてご自分からいのちを捨てられたのか？**

このことについてペテロは教えています。Iペテロ2:22-24「:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」、

1) 罪を犯したことがなく 22、23節

最初に見たように、イエスのうちには何の罪もなかったのです。確かにペテロはそのように教えています。

・「罪を犯したことがなく」 = このことばは「犯す」に否定語がついているのですが、「犯す」ということばの時制を見ると、彼の人生において一度も罪を犯したことがないということです。つまり、生まれてから最後の息を引き取るまで、主イエス・キリストの生涯はすべてにおいて全く聖いものであった、罪を犯すことがなかったということです。

・「その口に何の偽りも見いだされませんでした。」 = 行いだけでなく、イエスの口からは真実でないもの偽りが出て来たことはないということです。この「見いだされませんでした」という動詞は受け身が使われています。つまり、イエスのことばを聞いた人々が慎重に注意深く綿密に調べた上での結論を言っているのです。漸層法（ぜんそうほう、修辞法の一つ、同種の語句を重ねて次第に表現内容を強調して行って、読み手 OR 聞き手に強い印象を与えるような効果をねらう方法。）と言われるものです。人々はイエス・キリストのメッセージを聞いたのです。その上でこの結論に至ったということです。イエスの語られたことには全く嘘がなかったのです。罪がないお方でした。

その実例がこの後に続きます。「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」と。

・「ののしられても」 = 現在形を使っています。主の生涯において人々は常に主イエス・キリストをののしり続けていました。そんな生涯でした。本来なら、この地上に来られたからには皆から歓迎されて当然であるはずなのに人々は歓迎しないで、却って、人々は彼をののしり続けていたのです。

・「ののしり返さず」 = でも、イエスは人々のその悪に対して「ののしり返さず」と、未完形が使われていて過去において繰り返された出来事を示しています。イエスは人の悪に対して悪で応じることはなかったのです。すべてのことを父なる神にゆだねて来られたのです。

ですから、ペテロはこの22、23節で、イエス・キリストには何の罪もなかった、彼は言動においてすべてにおいて完全に聖いお方であったと言うのです。

2) キリストの犠牲 24節

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。…」、ここにもあるように、イエス・キリストの十字架はいよいよながらではなかった、自ら進んで十字架に架かれたのです。そして、そこで何をされたのか？「私たちの罪をその身に負われました。」

・罪を負う = 「罪を負う」とは、私たちに代わって、私たちが受けるべきさばきを代わりに受けてくださったということです。イエスはご自分の罪を負って十字架に架かれたのではありません。ご自分のうちには何の罪もなかったからです。ではなぜ、十字架に架かれたのか？それは「あなたの罪を負って」架かれたのです。この「負う」ということばには「だれかを、また、何かをいけにえとしてささげる」という意味があります。つまり、このことばが私たちの教えること、私たちが覚えるべきことは、神とはどういうお方かということです。たとえば、神は私たち人間の罪に対して「仕方がない、みな罪人であるし、弱いし…」という思いをもっておられるのか？決してそうではありません。神は罪に対して怒りをもっておられます。全く、ご自身の性質に反するものだからです。

どんな小さな罪であっても神はそれを憎んでおられます。怒っておられます。神が聖いお方であるゆえに、それが神の罪に対する態度です。ですから、私たちの罪に対して神は怒っておられるのです。だから、それをなだめるための「いけにえ」が必要なのです。主イエス・キリストが私たちの罪をその身に負って十字架に架かってくださった、彼は「いけにえ」として十字架に架かってくださったのです。それはあなたに対する神の怒りをなだめるためです。あなたを造られた神、この世界のすべてを造られた創造主なる神、すべてにおいて聖い正しい神が罪あるあなたのためにご自身のいのちを犠牲にしてくださいました。

これがこのみことばが私たちに教えることです。ペテロがそのように教えています。パウロもこう言います。Ⅱコリント5：21「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。」、罪の全くないお方が罪あるあなたの代わりに罪となったということです。だから、イエスが十字架でさばきを受けられたのはイエスの罪が原因ではなかった、あなたの罪が原因だったのです。イエスはあなたが受けるべきさばきを代わりに受けてくださったのです。何のためにそうされたのか？

この後を見るとその理由が記されています。

3) その目的・結果 24b-25節

「それは、…」、その理由です。「私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。」、私たちが新しく生まれ変わるため、私たちが救われるためです。ですから、本当のクリスチャンは罪から離れようとし、また、義のために生きようとする者です。そのように書かれています。救いに与った私たちはこれまでと同じ生き方をしたくないのです。もちろん、私たちは罪から完全に離れて罪を犯さない人間になりたいと願っています。でも、悲しい現実には、同じような罪を繰り返しています。でも、救いに与った者た

ちには新しい願いが与えられました。それは、今まで愛していた罪から離れたい、そして同時に、神が喜ばれることをしていきたいと、そのような者へと私たちは生まれ変わったのです。

私たちが生まれ変わるために主は喜んでご自身のいのちを犠牲にしてくださいました。それは「私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。」。罪と格闘しながら罪に敗北を何度も喫しながらも、神が喜ばれることをしていきたいのです。そのような新しい人へと私たちが造り変えるために、つまり、私たちが救うためにイエスは十字架に架かってくださいました。

続いて、「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とあります。

・キリストの打ち傷 = イエスの身代わりの死のことです。

・いやされた = それによって私たちは「いやし」をいただいたのです。罪からのいやしです。永遠の救いを私たちはいただいたのです。この「いやされた」ということばは「心の病をいやす」という意味もあります。ですから、イエスの救いによって私たちは罪がもたらす死の病からいやされたのです。もう、私たちは罪から完全に救い出されたのです。

そのことをペテロは私たちに教えたのです。ですから、確かにすばらしい教えを説く教師や教祖がいるかもしれませんが。話を聞いているとその教えに感銘を覚えるかもしれませんが。しかし、あなたの罪を負ってあなたのさばきをあなたに代わって受けてくださいましたお方はこのイエスだけです。教会にある十字架は何を象徴しているのでしょうか？主イエス・キリストはあなたのために身代わりとなって十字架上で死んでくださいました、そのことを私たちに教え続けているのです。

C. 死から復活されたお方

主イエスは「罪のないお方」であり、「身代わりに死なれたお方」であり、三つ目は「死から復活されたお方、死からよみがえられたお方だ」ということです。今見て来た I ペテロ 2 : 22-24 にはまた戻りますから開いておいてください。皆さんに思い出していただきたいのは、イエスが十字架で処刑されて亡くなったこと、それを見ていた弟子たちは大変な恐れを抱きました。なぜ、彼らは恐れを抱いたのか？主が殺されてしまった。自分たちがいつも頼りにしていたイエスが殺されてしまった。今度は自分たちのいのちまでも狙われるのではないかと大変な恐れを抱いたのです。

ですから、そのことが記されています。ヨハネ 20 : 19-20 「:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。」、イエスが十字架に架かって死なれた数日後のことです。「弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、」とあります。想像がつかますね。クリスチャンが集まったときにみな声を潜めて、だれも入って来ないように戸が閉められていたのです。なぜそんなことをしたのか？ここに書かれているように「恐れたから」です。ですから、イエスが亡くなった後、弟子たちはこのような状態にあったのです。でも、この人たちが変えられるのです。では、彼らを変えられた出来事は何だったのか？それは「イエスの復活」です。19節の後はこのように続きます。「イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」:20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。」と。それまで不安で恐れていた彼らは復活のイエスを見たときに喜んだのです。このイエスの復活を目撃することによって弟子たちは変えられたのです。どのように？「生ける望みを持つ者」へと変えられたのです。

I ペテロ 1 : 3 を見てください。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と、希望が生きているのです。つまり、希望が死に絶えることがないのです。継続してその希望が私たち信仰者の心を満たし続けている状態です。だから、クリスチャンは希望をもって生きる者たちです。これまでの私たちは、たとえば、死についての恐れを抱いていました。できるだけ死について考えたくもないし、死について語りたくもない。でも、私たちはイエス・キリストを信じこの救いに与ったゆえに、逆にその死さえも感謝する者に変えられたのです。

なぜなら、イエスがその死から敢然とよみがえって来られたように、私たちも「死んでもよみがえる」という希望を神が与えてくださったからです。ヨハネ 14 : 19 に「いましばらくで世はもうわたしを見なくなり。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです。」と教えます。イエスが死に完全に勝利されたゆえに私たちももうすでに死に対して勝利していると言うのです。皆さん、今日あなたの地上での生活が終わったとしても、あなたも私もどこへ行くのかを知っていますね？もう主はその場所を私たちのために備えてくださっているからです。ですから、私たちが今日この地上における生活が最後であったとしても、私たちはこの地上よりも遥かに優れたところ、神が用意してくださっているところに導かれて行くのです。そこで私たちに約束されていることは、私たちの愛する主にお会いできること、イエスの御顔を拝することです。このすばらしいイエスを誉め称えながら永遠をこの方とともに生きるのです。そこに私たちの愛する者たちが、この救いに与った者たちが、

もうすでに行っているのです。そこで彼らと再会できるのです。もう神を悲しませることもない。なぜなら、もう罪のからだから完全に解放されたからです。神を悲しませることもない、神に背くこともない、その新しい栄光のからだをいただいて神と永遠をと共に過ごすことができるのです。

信仰者の皆さん、それはもうあなたに与えられた約束でしょう！救い主イエス・キリストによって救いに与ったあなたにはその約束が与えられたのです。それを証明してくれたのがイエス・キリストの死からの復活なのです。イエスが多くの教祖たちや多くの偉人たちと同じようにまだ墓の中にいるのだったら、私たちはそんな希望を持つことができません。でも、イエス・キリストは死後三日目に確実によみがえって来られたのです。恐れていた弟子たちの前に現われて弟子たちはその喜びに溢れたのです。「主は生きておられる！約束なされたように生きておられる！」と。そして、私たちにこの希望をくださり、私たちをこの希望を持って生きる者へとしてくださったのです。

恐らく、多くの皆さんが I コリント 15 章のみことばを読んで感動を覚えたことがあると思います。I コリント 15 : 55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」、そして、57 節「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」、これまで死を恐れていた私たちはパウロが言うように「おまえの勝利はどこにあるのか？死よ、おまえは敗北した。もう死は私たちにとって恐怖ではない、なぜなら、イエス・キリストがよみがえって来たから。イエスはこの死に勝利された。そして、私たちもこの主とともにいるゆえに死に対する勝利者だ。」とすることができるのです。

「おまえのとげはどこにあるのか」と、ちょうど、針の無くなった蜜蜂のようなものです。もう刺されることは無いのです。もうこの死が私たちを脅かすことは無い。脅かされていたのはその後が不確定だからです。死を迎えた後どうになってしまうのかがわからないからです。でも、聖書を通して私たちはそのことを教えられました。主イエス・キリストがそのことをお語りになり、そして、お語りになったことが真実であることをご自身の復活によって証明してくださったのです。「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。」(ヨハネ 14 : 2) と、あなたも私ももう天に住まいが備えられているのです。そこに行く日を待っているのです。何があっても私たちはその神の約束を覚えて生きるのです。

* このような生き方を可能にしたのは「主の復活」だった

このような希望を持って生きる者へと私たちを変えてくださった。それはすべてこの主の復活でした。イエスは墓の中にいるではありません。その死から敢然とよみがえって今も生きておられる。それが私たちの主であり、創造主なる真の神ご自身です。

D. 預言されていた救い主 11 節

「使徒の働き」に戻って 4 : 11 を見てください。「『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった』というのはこの方のことです。」とあります。このみことばは詩篇 118 : 22 の引用です。118 : 22 「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。」、ペテロは敢えてユダヤ人のリーダーたち、また、群衆たちがよく知っているこの旧約聖書のみことばを引用してあるメッセージを彼らに教えようとしたのです。それは、このイエス・キリストこそが約束の救世主であるということです。そのことを明らかにしたのです。

「捨てられた石」、人々はイエス・キリストのうちに何の価値も見いださずして、イエスを見たときに彼らはイエスを信じ崇めたかという全くその逆でした。彼らはイエスをののしり続けています。彼らから全く捨てられた石だと言います。でも、彼らが捨てた石は真の神であった。約束の救世主でした。そして、その方によって教会が建て上げられ、その教会の土台になったのはこのイエス・キリストです。だから「礎の石」であるということです。人々が無価値だとして蔑み退けた石は「教会の土台、礎石」として神から栄誉をお受けになられたのです。

ペテロは「あなたがたはイエスを十字架へと追いやった。あなたたちはこの石を捨てた。でも実は、この石、つまり、イエス・キリストは旧約聖書が約束していた救世主なのだ。旧約のみことばの中に記されていたそのお方こそがこのイエス・キリストなのだ。」ということ告げるのです。約束の救世主がこの世に来られることも、そして、人々から蔑まれ殺されることも、そして、その後その死から敢然とよみがえって来られることも、すべて旧約聖書の中で預言されていたことでした。ですから、ペテロが伝えていることは「あのイエス・キリストこそが約束の救世主、メシヤだったのだ」ということを改めて彼らに伝えるのです。

この 11 節で見ていただきたいのは、これは詩篇 118 篇の引用ではあるのですが、11 節でペテロはあることばを加えているのです。それは「あなたがた」ということばです。ここでペテロは、イエス・キリストを拒み続け、十字架に追いやったこのリーダーたち、つまり、「あなたがた」の罪を明らかにするのです。「あなたがたが何をしたのか覚えているでしょう？あなたがたですよ！キリストを十字架に追いやって行ったのは！」と。非常に興味深いのは、この人たちは宗教家たちです。ユダヤ教のリーダ

一たちです。彼らは自分たちの行いによって救いに与っていると確信していた連中です。なぜなら、ユダヤ教の教えを真剣に守り熱心にそれを行いつけて来たからです。そのような人たちに対してペテロが伝えたことは「あなたがたは救われていない。あなたがたは神の前に大変大きな罪を犯した」ということです。

どんなに宗教に熱心であっても宗教には救いはありません。それは自分の努力や行いで罪の赦し、天国を得ようとする人間の考え出した方法にすぎないからです。どうすれば天国に行けるかとみんな一生懸命考えたのです。そして、いろんな考えが生まれて来ました。でも共通していることはみな、「こうすればきっと天国に行けるに違いない」とあくまで人間が考え出した方法にすぎないのです。

皆さん、もし私たちが人に対して罪を犯した場合は、その人から赦しを得ることが必要でしょう。その人のところに行って「ごめんなさい」と言わなければいけません。そうして赦しをもらうわけです。私たちが神に対して罪を犯したなら神のところに行って「赦してください」と問わなければいけないし、その方が「こうしなさい」と言われることを私たちはしなければいけないと思いませんか？

私たちの罪というのは、たとえ、それが人に対して犯したものであってもすべての罪は神に対するものなのです。どういう意味か説明します。神は私たち人間に対してどのようなことを命じておられるのか？申命記の中にこういう教えがあります。申命記 13 : 4 「あなたがたの神、【主】に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。」と、あなたをお造りになった創造主なる神はあなたにこのような命令をお与えになりました。「あなたは主に従って歩みなさい。あなたは主を恐れなさい。主の命令を守りなさい、その御声に聞き従いなさい。」と。この神の命令にあなたは服従できていますか？

確かに、私たちはいろんな罪を犯す者です。一例を上げるなら、人を妬んでみたり、嘘を言う、盗みを働く、心の中で殺人を働くなど…。でも、よく考えるとこれらはすべて神がしてはならないというところに行っていることです。そのことにお気づきになりませんか？確かに、これは被害を与えた人たちに対して罪を犯したのです。でも、その行ないすべてを見た時に、そのすべては神が「してはならない」と言われたところに行っているのです。だから罪というのは神に対するものなのです。

それが証拠に、ダビデ王がナタンという預言者から彼の罪を示されたとき、姦淫の罪、殺人の罪がありました。その罪を明らかにされた時にダビデが何と告白したのか覚えていますか？ II サムエル 12 : 13 a 「ダビデはナタンに言った。「私は【主】に対して罪を犯した。…」と。ちょっと不思議ですね。「私は一たとえば一ナタンに対して罪を犯した」とは言わないのです。もちろん、そこには謝罪を必要とすることは当然あります。でも、ダビデが言ったのは「私は神に対して罪を犯した」でした。なぜなら、殺人も姦淫も神に対する罪だからです。神の掟に反する行為だからです。だから残念ながら、私たち人間は生まれながらにこの神に逆らう者、神に対して罪を犯し続けている者なのです。

私たちは「罪」ということばを余り使い慣れないのですが、「罪」とはこういうものです。罪の本質は「あなたを造られた神を愛さないこと」です。神よりも自分を愛することです。だから、神の命令に従うことよりも自分の思いや考えに従って生きることを選択するのです。私たちはそのようにして生きて来ました。最初に話したように、私たちには「だれを崇拝するか」はいつでもよいのです。信心の気持ちさえあれば良いと言います。でも、考えなければいけません。本当に神がそのように言われているのかどうか？です。神はそんなことは言われていません。神でないものを神として崇拝することは神に対する罪です。「何でも良い」ではないのです。私たちは神、その方を心から信じ心から崇めることです。私たちが気付かなければいけないのは、私たちが日々犯す様々な罪はすべて神がしてはならないと言われる神の掟に反することです。それを私たちは犯し続けているのです。そして、私たちの生き方を見る時に、確かに、私たちは神よりも自分を愛しています。神に従いたくない、自分のやりたいように好きに生きていきたいと。これが罪なのです、皆さん！救いに関しても同じことが言えます。神が備えてくれた救いよりも人間の教えを信奉しているのです。神が何と言われたのかはいつでも良いのです。「私はこれを信じて来た。これで十分です」と。

先ほども見たように、あなたが神に対して罪を犯している以上、赦しに関して神ご自身にその方法を伺わないといけません。本来なら、私たち一人ひとり「神さま、どうすれば赦して下さるのですか？どうすればこの罪の汚れを赦していただけるのですか？」と問うはずですが。感謝なことに、神はその方法を示してくださっています。「主イエス・キリストを信じる信仰によってあなたの罪を聖める」と。皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、人間が考え出した宗教は一生懸命その教えを守ろうと努力をしてその努力もその熱心さもその人間を満足させることはできたとしても、肝心の神を満足させることはできないということです。なぜなら、それは神が備えてくださった方法ではないからです。

今日私たちが見て来たのは、イエス・キリストとはどんな方なのか？イエスは罪の無い方であり私たちのために身代わりとなって死んでくださった方であり、死から敢然とよみがえった方であり、そして、

預言されていた救世主だったと。だから、ペテロは「この方以外には、だれによっても救いはありません。」と語ったのです。その後「世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」と続きます。なぜなら、このイエス・キリストこそが神ご自身が私たち人間に与えてくださった救いの唯一の道だからです。

宗教は人間が一生懸命努力して天国に入るその努力です。しかし、イエス・キリストは神ご自身がこの世に来てくださり、神ご自身が私たちのために救いの道を開いてくださり、そして、その道を私たちに提供してくださったのです。

罪の赦しは与えられます。救い主はすでに来られました。そして、あなたのために救いを備えてくださったのです。今一度、ペテロのメッセージを思い出してください。「…あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」(使徒3：19)、これがあなたへのメッセージです。主に対するこれまでの罪を悔い改めて主を信じて救いをいただくことです。主に逆らい続けることを止めて、主を信じて従うことを今決心することです。主が備えてくださった救いを心から感謝をもって受け入れるなら神の約束はあなたのうちに成就します。これが主が私たちのために備えてくださった救いです。

主イエス・キリストのご降誕を記念するこの日に、主がこの世にお見えになったその目的は何か、あなたを救うためです。そのために救いを備えてくださった。まだ、この救いをお受けになっていないなら、今日この救いを心から受け入れてこのすばらしい神の救いをご自分のものにしていただきたい！！そのことを心から願いお勧めします。